

の関心の的である人間を書く。そしてそれらの人物が読者に理解され、愛されて、始めてその作家は単なる地方作家から全国的作家——言葉は何でもいいんですが要するに普遍的存在を書く作家——になるのだと思います。

ですから私がカナダ小説を書いていると単純にお考えになると、大きな間違いを犯すことになる。そんなことは不可能だからです。トロントの作家が、トロントはカナダだからカナダ小説を書いているのだと、欺瞞的に思い込むこともあるでしょうが、現実には、外の人間にとってトロントは他所の土地にすぎない。だから、作家はその土地を理解させるには技量を使い、そこに住む人々を理解させるには心を使うことが大切なのです。

西本 その点で現在成功している作家または詩人の名前を何人があげていただけませんか。

ホッジンズ すぐに思い浮かぶのは、オンタリオ州出身の素晴らしい短編作家アリス・マンロー、平原地方出身のすぐれた小説家マーガレット・ローレンス、東部沿岸の詩人オールデン・ノーラン、バンクーバーの詩人アール・バーニーといったところでしょうか。ほかに平原地方の小説家ロバート・クロウチもあげていいと思います。

それから誰よりも先にあげるべき作家として、ルデイ・ウィープがいます。アルバータ州の小説家で、カナダの歴史を自分のテーマとしている人で、平原地方の歴史の中から、ビッグ・ベンとかルイ

・リエルのような人物を好んで書いています。ビッグ・ベンというのは白人との和平協定調印を拒んだインディアン酋長、リエルは有名な反乱の指導者で、最後は絞首刑に処せられた人物です。こうした一見、歴史小説を書いているように見えながら、ウィープという作家は世界全体のビジョンを、あるいは人間のビジョンをそこに投影している。そのビジョンというのは宗教的でもあり、普遍的でもあるきわめて深みのあるものです。ウィープ自身、自分の狙いは大きい、北米のトルストイになるつもりだ、と公けの場で言ったことがあります。

西本 そりゃあ大変だ。

ホッジンズ カナダには、大胆な作家が何人かいて、自分はちっぽけな文化から生まれたが、自分が相手にするのは全世界だと自負しているんです。だからとてつもない失敗作もあれば、いくつかの成功作もあるわけです。でも、危険があればこそ、面白いと言えるんじゃないでしょうか。

西本 そう、もちろんそうでしょうね。フランス系作家では、どういう人があげられますか。

ホッジンズ フランス系作家にも、前に言った範疇の人が何人かいます。ロック・キャリエなどは、私の個人的に好きな作家です。村の生活を書いた彼の小説はいいですね。私自身が村で育ったせいもありますが、フランス系でもカトリックでもない私にも、彼の小説の中の事はよくわかります。劇作家のミシエル・ト

ランブレイも素晴らしい。彼の作品は世界中で上演されてしかるべきですよ。彼の場合、非常にカナダ的、ケベック的なんですが、大変すぐれた劇作家ですから。西本 カナダにはフランス系とイギリス系とが共存するという状況があるわけですが、ホッジンズさんは、この共存が文学を豊かにする上で役に立つとお考えですか。ホッジンズ ええ、確実に役に立ってきたと思います。フランス系カナダの作家から見ると、自分が、孤立した文化の担い手だと常に意識させられてきた。自分が今これを書きとめておかなければ、

ホッジンズ氏の横顔

バンクーバー

島の木こり村で

生まれ、そこで

育つ。同島ナナ

イモの高校で英

語教師を勤める

かなわら、小説

を書き続ける。四十一才。主な作品

に、Spit Delaney's Island, The

Invention of the World, The Re-

surrection of Joseph Bourne など。

バンクーバー島にある架空の村

ポート・アニーで起こる奇妙なでき

ごとを扱った The Resurrection

of Joseph Bourne (ジョセフ・ブ

ーンの復活)写真で、今年のカナダ

総督文学賞(フィクション部門)を

受賞している。



消滅してしまうだろうという、一種の危機意識を持たされてきたんですね。だか

らこの点で共存は立派に役立っている。一方、英語系カナダ人ですが——現実とは違ったニュアンスがあるんで、イギリス系カナダ人という言葉を使いたくありません——英語系カナダ人は、自分と同じ言語を使う圧倒的に巨大な文化と隣り合っているという意識、だからもしこれを書きとめておかなければ、消滅してしまうだろうという似たような危機感がある。われわれは——文化的に言うと英語系カナダの作家はということですが——アメリカに対して、ちよどケベックの作家がイギリス系カナダに対して抱いているのと同じような感情を持っているんです。先程言った危機意識ですね。作家を創作に駆り立てている衝動の一つは、こうした切羽詰まった願望じゃないでしょうか。文化が消滅する前にそれをしっかりと真の上に残しておきたいという……。西本 これまでのお話から申しますと、いろいろ困難な状況があるにもかかわらず、カナダの作家は生き残る可能性について非常に自信たっぷりですね。ホッジンズ まあ、若者のもつ傲慢かもしれません。傲慢と言ったのは、前向きの意味であって、愛すべき高校生によく見られるような無邪気な傲慢さです。他を軽蔑する類いの傲慢さじゃない。世界は自分達のもの、今後も自分達のものだという絶対的信念——そうした希望を依然として持てるだけの若さがあれば、誰でも当然そのような意味で傲慢になるんじゃないでしょうか。